『更級日記』における引用構文

鶴田洋子

一　はじめに

三上（一九六三）は「～to言フには、だれかのセリフをそのまま取り次ぐというタテマエの直接話法と、それを話し手のコトバで要約して伝える間接話法とがある、ということになっている。[1]」と述べた。寺村（一九八一）は「文をもう一つの文の中に取り込んでその一部とするもっとも普通の形式の一つは引用の形式であろう」とし、「これはその文をそのままの形で取り込むことができる形だ。[2]」と述べた。

一つの文をもう一つの文が取り込む引用は、日本語の場合、考えるべきことがまだ多く残されている。「引用には直接引用と間接引用がある。直接引用は誰かの発言（またはそれに準じるもの）をそのまま引用する、言葉の引用である[3]」とあるが、日本語の引用はどのようになされているか、という点で、なお考えるべき点が見られる。

前述の三上は引用動詞として、言ウ、話ス、語ル、告ゲル、教エル、叫ブ、聞ク、問ウ、答エル、書クなどの意味を持つ動詞多数を挙げているが、実際には三上の言う引用動詞とは言いがたい、「（手を）振る」「出かける」などの動作の動詞も使われている。現代語では、次のような用例が見られる。

（1）医員殿は看護婦室にもどると、あとの指示をして、「最後までご苦労様。さようなら」と手を振って廊下に消えました。（阿部初枝『看護婦一年生』）

（2）妻もいたたまれなくなったのか「ちょっと犬の散歩に行ってくるわ」と出かけた。（川一『癌は、神様からのプレゼントだった』）

この問題に関して、引用節と動詞の間に「と言って」などが省略されている説、引用を受ける動詞には二種類あるという説などがあるが[4]、日本語ではどのような動詞が引用節と共起するのかという点で、明瞭になったとは言えない。筆者は時代の異なる文学作品から実際に引用構文を抽出し、そのスタイル、引用節を受ける動詞などを観察し、日本語の引用についての一端を明らかにしようと試みてきた。

ここでは『更級日記』から引用の構文を一八三例取り出し、引用のスタイルや引用節に後置される述語などについて考察することにする。

テキストには犬養廉校注・訳『更級日記』（日本古典文学全集『和泉式部日記紫式部日記更級日記讃岐典侍日記』小学館）を使用した。話法は問わず一重引用符が付してあるところを中心に、引用構文と見られる文を訳注も参考にしながら抽出した。なお、「『引用内容』などV」の構文は「『引用内容』とV」と同じと考えて例の中に入れた。また、一連の発話の中に見られる引用構文は考察の対象外とした。

以下、引用構文のスタイル、助詞「と」「とて」を受ける述語、発話主は誰か、ということについて述べていくことにする。

二 引用のスタイル

三上（一九六三）は直接話法には正置、反復、例置、セリフ止めの四種類あると述べたが、筆者は引用構文を次のように分類して考える。発話思考内容の前にある動詞をV1、後ろにある動詞をV2として、次の七パターンに分類する[5]。

①「V1『発話思考内容』とV2」
②「V1『発話思考内容』とてV2」
③「V1『発話思考内容』（と）」
④「『発話思考内容』とV2」
⑤「『発話思考内容』とてV2」
⑥「『発話思考内容』」
⑦「『発話思考内容』とV2。『発話・思考内容』」

『更級日記』では、①「V1『発話思考内容』とV2」七例、④「『発話思考内容』とV2」一六三例、⑤「『発話思考内容』とてV2」一二例、⑥「『発話思考内容』」一例、合計一八三例である。

まず、①「V1『発話思考内容』とV2」について述べる。

「語るやう～語る」「見ゆるやう～見る」「思ひしことは～思ふ」など、「語る」「思ふ」「見る」のような二つの動詞が引用節の前後を挟んでいるタイプは、『更級日記』では一八三例中七例で、全体に占める割合は多くないが、構文として見た場合は二つの動詞が一つの機能を果していると思われる。

例（3）[6]では「語る」が発話内容の前後を挟んで用いられている。発話主[7]は「その国の人」である。二つの「語る」に挟まれた発話は全体を一まとまりとして扱うべきであろう。

この前に竹芝伝説が語られる箇所があり、この発話より長いがこのスタイルは用いられていない。単に発話内容が長いときに「V1『発話思考内容』とV2」が用いられるとは言えないのだが、前後二つの動詞は発話の始まりと終わりを示し、内容をまとめる機能を果たしているとは言えそうである。

（3）その国の人の出でて語るやう、「一年ごろ、ものにまかりたりしに、いと暑かりしかば、この水のつらに休みつつ見れば、川上の方より黄なる物流れ来て、物につきてとどまりたるを見れば、反故なり。とり上げて見れば、黄なる紙に、丹して、濃くうるはしく書かれたり。あやしくて見れば、来年なるべき国どもを、除目のごと、みな書きて、

この国来年あくべきにも、守なして、また添へて二人をなしたり。あやし、あさましと思ひて、とり上げて、ほして、をさめたりしを、かへる年の司召に、この文に書かれたりし、ひとつ違はず、この国の守とありしままなるを、三月のうちに亡くなりて、またなりかはりたるも、このかたはらに書きつけられたりし人なり。かかることなむありし。来年の司召などは、今年この山に、そこばくの神々あつまりて、ないたまふなりけりと見たまへし。めづらかなることにさぶらふ」と語る。（p 290）

次の例（4）も、「見る」が夢の内容の前後を挟んでいる。二つの「見る」が括弧のような機能を果たしていると考えることができる。このことは例（5）でも言える。「夢に見るやう」から「見る」までが夢の内容である。

（4）物語のことを、昼は日ぐらし思ひつづけ、夜も目のさめたるかぎりは、これをのみ心にかけたるに、夢に見ゆるやう、「このごろ皇太后宮の一品の宮の御料に、六角堂に遣水をなむつくる」といふ人あるを、「そはいかに」と問へば、「天照御神を念じませ」といふと見て（p 300）

（5）夢に見るやう、清水の礼堂にゐたれば、別当とおぼしき人出で来て、「そこは前の生に、この御寺の僧にてなむありし。仏師にて、仏をいと多く造りたてまつりし功徳によりて、ありし素性まさりて人と生まれたるなり。この御堂の東におはする丈六の仏は、そこの造りたりしなり。箔をおしさして亡くなりにしぞ」と。「あないみじ。さは、あれに箔おしたてまつらむ」といへば、「亡くなりにしかば、こと人箔おしたてまつりて、こと人供養もしてし」と見てのち、（p 327）

テキストの括弧の付け方とは異なるが、例（5）は「そこ」という対称名詞が使用されていることから「見るやう」から「見て」までが心内発話の引用と考えることができる。それは草双紙では「吹き出し」として表現されるような作者が見た夢の一場面であり、[8] あたかも作者が清水の礼堂に居るように語られていると考えられる。

同様に例（6）も前後二つの「思ふ」が思考内容を挟んでいると考えられる。例（7）も同様に思考内容が二つの「思ふ」に挟まれている。どちらも作者の『源氏物語』に対する想いが語られているところである。例（7）は、「この世に」から「よしなかりける心なり」までが心内発話の内容である。

（6）からうじて思よることは、「いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに、山里にかくし据ゑられて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心ぼそげにて、めでたからむ御文などを、時々待ち見などこそせめ」とばかり思ひつづけ（p 314）

（7）このあらましごととても、思ひしことどもは、この世にあんべかりけることどもなりや。光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。薫大将の宇治にかくし据ゑたまふべきもなき世なり。あなものぐるほし。いかに、よしなかりける心なりと思ひしみはてて（p 329）

次の例（8）は二つの「言ふ」が発話内容の前後を挟んでいる

例である。資通の発話であるが、比較的長い発話が二つの「言ふ」でまとめられている。

（8）春秋のことなどいひて、「時にしたがひ見ることには、春霞おもしろく、空ものどかに霞み、月のおもてもいと明うもあらず、遠う流るるやうに見えたるに、琵琶の風香調ゆるるかに弾きならしたる、いといみじく聞こゆるに、また秋になりて、月いみじう明きに、空は霧わたりたれど、手にとるばかりさやかに澄みわたりたるに、風の音、虫の声、とりあつめたる心地するに、箏の琴かきならされたる、横笛の吹き澄まされたるは、なぞの春とおぼゆかし。また、さかと思へば、冬の夜の、空さへさえわたりいみじきに、雪の降りつもりひかりあひたるに、篳篥のわななき出でたるは、春秋もみな忘れぬかし」といひつづけて、（p334）

『枕草子』にも（9）のように二つの「言ふ」が発話内容を挟んでいる例がある。

（9）常にいふことは、「おのれをおぼさむ人は、歌をなむ詠みて得さすまじき。すべて仇敵となむ思ふ。『いまは、限りありて、絶えむ』と思はむ時にを、さることはいへ」などいひしかば（枕上p178）

発話内容に前置される動詞V1、後置されるV2は発話思考を表す動詞である。二つの動詞が発話を挟むことにより発話思考内容の範囲を明示している。つまり、二つの動詞が、引用符の機能を果たしていると言えるのではないだろうか。

次に④「『発話思考内容』（など）とV2」⑤「『発話思考内容』とてV2」について述べる。前述したように動詞が引用内容に後置される例は同じ動詞が前後を挟む場合に比べると圧倒的多数を占める。中でも「と」が受ける引用のほうが多数である。引用内容を受ける「と」と「とて」を、分けて述べることにする。

三「と」「とて」を受ける述語

『更級日記』の引用構文で、「と」に後置される述語は次の通りである。なお、「『発話思考内容』とV2」の構文を抽出するにあたって、「『発話思考内容』などV2」も加えた。また、前述した①の構文も「発話思考内容」を「と」で受けているため、後置される動詞は次の語群に加えた。複合動詞「いひつづく」などの場合は「言ふ」に入れた。

「と」に後置される語

言ふ47思ふ38見る10聞く7問ふ7あり6書く7語る5おぼゆ4あはれがる3祈る2のたまふ2ひとりごつ2申す2呼ぶ2泣く2聞こゆ2泣く2詠む1こたふ1うたふ1責む1笑ふ1伝ふ1見ゆ1嘆く1召す1かくす1待つ1むつかる1念ず1おほす1尋ぬ1ながむ1をかしがる1心苦しがる1わずらはしがる1めずらしがる1あはれ1うしろめたし1

右の語群を「引用内容」との関係で分類を試みたのが表1である。発話を表す動詞①が最多で、心内発話②が次に続く。使用頻度で一番多かった動詞は「言ふ」である。

（10）国の人々集まり来て、「その夜この浦を出でさせたまひ

て、石津に着かせたまへらましかば、やがてこの御舟なごりなくなりなまし」などいふ（p353）

次に「思ふ」が続く。「思ふ」については心内発話の発話主をどう書き表すかということで後に述べる。

「と」を受ける語の中でもう一つ注意しておきたいことは、例（11）～（15）のように形容動詞に接尾辞「がる」が付いた感情動詞、例（16）のように形容動詞「あはれ」が後置される例、例（17）のように形容詞「うしろめたし」、が後置される例が見られることである。

（11）「もろこしが原に、やまと撫子しも咲きけむこそ」など、人々をかしがる。（p287）

（12）山のなからばかりの、木の下のわづかなるに、葵のただ三筋ばかりあるを、「世ばなれてかかる山中にしも生いけむよ」と、人々あはれがる。（p288）

（13）「いとうつくしう生ひなりにけり」など、あはれがり、めづらしがりて、（p298）

（14）母いみじかりし古代の人にて、「初瀬には、あなおそろし。奈良坂にて人にとられなばいかがせむ。石山、関山越えていとおそろし。鞍馬はさる山、率て出でむいとおそろしや。親上りて、ともかくも」と、さしはなちたる人のやうにわづらはしがりて（p319）

（15）「まだ知らぬ人のありける」などめづらしがりて、（p334）

（16）花の咲き散るをりごとに、乳母亡くなりしをりぞかし、とのみあはれなるに（p301）

（17）後の世も、思ふにかなはずぞあらむかしとぞ、うしろめたきに、（p358）

犬養訳ではこの部分は次のような現代語になっている。

（11）「」（発話内容省略以下同じ）などと人々はうち興じていた、（12）「」と人々はいとおしがるのだった、（13）「」など、となつかしがり珍しがって（14）「」と、私をまるでのけ者のように、厄介がって、（15）「」などと珍しがって、というように、おおむね「がる」がそのまま現代語訳にも使われている。例（16）は、「」とそればかりが思い出されて心が傷むのだがと、「思い出す」が補われている。また例（17）は気がかりだったところ、と訳されている。

『枕草子』にも、例（18）のように「思考発話内容」に感情動詞、例（19）のように形容動詞、例（20）のように形容詞が後置される例がある。

（18）「三月三日、頭弁の、柳蔓せさせ、桃の花を挿頭に刺させ、桜腰に差しなどして、ありかせたまひしをり、『かかる目見む』とは思はざりけむ」などあはれがる。（枕上p37）

（19）「さば、翁丸にこそはありけれ。昨夜は隠れ忍びてあるなりけり」と、あはれにそへて、をかしきことかぎりなし。（枕上p40）

（20）賢淵は、「いかなる底の心を見て、さる名をつけけむ」とをかし（枕上p48）

次に「とて」が発話内容に後置される「『発話内容』とてV2」について述べる。このスタイルは前述の「『発話思考内容』とV2」より少数で、『更級日記』では一二例見られるにすぎない。「と

て」に後置される語は動作を表す動詞で、「と」のように発話思考を表す動詞は見られない。また、形容詞や形容動詞の例もない。

「とて」に後置される語

とりいれる2投げいづ2おこす2とらす1出す1もとむ1宿る1居る1まうず1

(21) 上り着きたりし時、「これ手本にせよ」とて、この姫君の御手をとらせたりしを（p297）

(22) めづらしがりてよろこびて、御前のをおろしたるとて、わざとめでたき冊子ども、硯の筥の蓋に入れておこせたり。（p295）

(23) 「いとうつくしう生ひなりにけり」など、あはれがり、めづらしがりて、かへるに、「何をかたてまつらむ。まめまめしき物は、まさなかりなむ。ゆかしくしたまふなる物をたてまつらむ」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、せり河、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一ふくろとりいれて（p298）

(24) そのほど過ぎて、親族なる人のもとより、「昔の人の、かならずもとめておこせよ、とありしかばもとめしに、そのをりはえ見出でずなりにしを、今しも人のをこせたるが、あはれに悲しきこと」とて、かばねたづぬる宮といふ物語をおこせたり。（p305）

(25) 「今は宿とれ」とて、人々分かれて、宿もとむる、所はしたにて、「いとあやしげなる下衆の小家なむある」といふに、「いかがはせむ」とてそこに宿りぬ。（p344）

(26) 三日さぶらひて、暁まかでむとてうちねぶりたる夜さり御堂の方より「すは、稲荷より賜はるしるしの杉よ」とて物を投げ出づるやうにするに、（p345）

(27) 児どもの親なる人は、「いかにもいかにも心にこそあらめ」とて、いふにしたがひて、出したつる心ばへもあはれなり。（p341）

『更級日記』では「と」と「とて」とに後置される動詞は異なる。「とて」は発話或いは心内発話の後に動作が行われたと考えられる。「と」と「とて」に後置される動詞のうちで重複するのは例（28）例（29）で示すように「泣く」だけである。

(28) 車より下りたるをうち見て、「おはする時こそ人目も見え、さぶらひなどもありけれ、この日ごろは人声もせず、前に人影も見えず、いと心ぼそくわびしかりつる。かうてのみも、まろが身をば、いかがせむとかする」とうち泣くを見るもいと悲し。（p326）

「泣く」は発話なのか動作なのか分け難い。例（28）では発話に付随して「泣く」行為があると考えられる。例（29）は夢の内容を語る場面の中の発話であり、二重引用符が付された内容を受ける「とて」だが、「泣く」に前置されるのは「とて」もある例としてあげておく。

(29) この僧帰りて、「（前略）『あやしかりける事かな、文添ふべきものを』とて、『この鏡を、こなたに うつれる影を見よ、これ見ればあはれに悲しきぞ』とて、さめざめと泣きたまふを見れば、臥しまろび泣き嘆きたる影うつれり。（後略）」と語るなり（p320）

発話主は「いみじうけだかう清げにおはする女」であるが、発

話の後にさめざめと泣く行為があったと考えられる。

次に発話主について述べる。

四発話主は誰か

（30）この僧帰りて、「」と語るなり。（p320）

（31）ものはかなき心にもつねに、「」といふ人あり。（p321）

発話主は、例（30）のように「発話内容」に前置されるか、後置されるかどちらかである。例（31）のように連体修飾語として「発話内容」に後置される例もある。しかし、発話主が「発話内容」の前後に出てこない場合も少なくない。

一八三例のうち、一文の中に発話主が明示されているものは六一例、明示されていないものは一二三例である。

また発話主が明示されている場合でも、自称対称を指す人称代名詞は現れない。例（32）、例（33）、例（5）、のように「われ」「そなた」「そこ」などの用例はあるが、発話主として「発話内容」と共起する例はない。

（32）われはこのごろわろきぞかし、さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。（p298）

（33）ひとへに　そなたひとつを頼むべきならねば、われよりまさる人あるも、うらやましくもあらず（p330）

発話主として、六一例は一文の中に明示されていて特定できるが、あとの一二二例は明示されていないので文脈の中から察する外はない。このことについて、次の三種類に分類して考えてみることにする。

A発話主が明示されているもの　六一例

B発話主が明示されていないが、孝標女以外　二八例

C発話主が明示されていないが、孝標女と見られる　九四例

誰が発話したのか、読むものが理解できなければその内容は正確に伝わりにくい。『更級日記』では発話主が一文の中に明示されていない例は少なくない印象だが、三種類に分けて考えた場合には確かにCが一番多い。次いでA、次にBとなる。孝標女以外の発話は発話主が記され、孝標女の発話は記さないとなればわかりやすいのだが、そう単純ではないようだ。孝標女以外の人が発話していると思われるのに、発話主が書かれていないBがあるのである。

これを内容の分類別に見てみよう（表二）。心内発話の場合はCが多数を占めている。「思ふ」は三八の用例のうち、例（34）のように発話主が明示されているのは一例だけで他は作者の心内発話と推定される。「ひとりごつ」「おぼゆ」なども同様で、心内発話の主は特に記されていなければ作者である。

（34）古代の親は、宮仕人はいと憂きことなりと思ひて過ごさするを。（p324）

同様に自分が受信した内容を表す「見ゆ」「聞く」もCである。夢は作者の心中で受信したものであり、他の人には見えない。「聞く」も作者が受信した内容である。

（35）わが耳ひとつに聞こえて、人はえ聞きつけずと見るに、（p358）

（36）旅居は雨いとむつかしきものと聞きて（p347）

「言ふ」など、発話を表す動詞の場合は三つに分かれる。Aが一番多いが、BもCもある。

待遇表現により人称を表す場合がある。「申す」「きこゆ」などの謙譲語の場合は発話主は自称であるし、「おほせらる」など尊敬語の場合は自称ではない。人間関係により待遇表現でだれが発話したか推察できる用例がある。「言ふ」は、発話主が明示されているのは二五例である。文中に発話主がなく、作者以外の発話と思われるBが一〇例、作者の発話と思われるCは一二例である。Bは一〇例だが、わからない誰かが発話している例と、発話主は誰か作者にはわかるのだが、書かれていない例に分れる。

例（26）は「すは稲荷より賜はるしるしの杉よ」という発話であるが、誰が言ったか、作者にとっても不明である。

書かれていないが発話主がわかる場合に、前の文には記されているという例もある。例（37）のように前文に母とあれば、次の文の「言ふ」の発話主は母と了解できる。

（37）母、一尺の鏡を鋳させて、え率て参らぬかはりにとて、僧を出だし立てて初瀬に詣でさすめり。「三日さぶらひて、この人のあべからむさま、夢に見せたまへ」などいひて、詣でさするなめり。（p 320）

発話主が文中にない場合、前出などで誰かが判断できる場合には発話主は書かれない。しかし、発話主は明らかなのに、発話主としての名前が出てこない例がある。

資通が発話主の場合が八例あるが、発話主として名前はない。「参りたる人のあるを」（p 333）とその人物の登場が述べられているだけである。この場面は『更級日記』中でも印象的であるが、発話主として名前は記されていない。文脈により察するほかはない。

この人物の発話は作者の心の中に刻印されていて特に書く必要が無かったのか、或いは記すことが憚られたのか、いずれにしても、発話主が書かれていないことに、人物を朧化させる効果を与えているように思われる。作者には内面化されている風景を、読者が察する外はないことにより、逆に強い印象を残しているように思われてならない。

五おわりに

以上述べたことをまとめる。

引用のスタイルでは、二つ動詞が発話の前後を挟み、現代の引用符のように使われているものがあることを述べた。「言ふ」「思ふ」「語る」などの用例がある。また、「見る」を使って夢の場面を描く例もある。

発話に後置される「と」と「とて」を見てみると「と」が後置されるほうが圧倒的多数である。「と」に続く動詞では「言ふ」をはじめとする発話を表す動詞が多数を占め、心内発話、受信などを表す動詞が続く。

「と」「とて」に後置される動詞は異なる。『更級日記』で重複するのは「泣く」だけである。「と」に後置されるのは、発信、受信、それに伴う行為や心情に関する述語であり「とて」は発話後の動作を表す動詞である。

『更級日記』では心情に伴う発話を「がる」が付いた感情動詞

で表す例も見られる。また、形容詞、形容動詞が後置される例も見られた。これは他の女性による作ではどうなのか興味あるところである。

前述したように「と」に後置される述語は動詞しか考えていなかったが、形容動詞、形容詞の例もあるとわかった。感情動詞は現代語でも（37）のように用例がある。また、形容詞も、（38）のような例がある。

（37）メッツも候補の一つに入っていた。それを知っているファンが、「なぜメッツに来なかったか」と悔しがるのも当然である。（広岡勲『松井秀喜メジャー物語』）

（38）リゾートクラブに至るにしては道はやけに細く、このまま行き止まりになるのではないかと心細い（鈴木光司『リング』）

日本語における引用構文のスタイルを⑦まで挙げたが、⑧として、「『発話思考内容』と形容（動）詞」も加えるべきであることがわかった。

発話主はどのように書かれているかという点で見ると、『更級日記』では発話主が一文の内に書かれているものと書かれていないものがあることがわかる。書かれていないものは更に作者以外と作者自身に分けることができる。自称、対称にあたる語が発話主として使われる例はない。発話主は待遇表現で推定できる場合がある。心内発話、受信の動詞の場合は通常発話主が書かれていない。心内発話には基本的に「自称」が内抱されていると考える。

発話主が記されていない例のうち、自称以外のものもあり、読者が察する外は無い発話も少なくない。資通は『更級日記』では印象的な人物であるが、発話主としての名前は書かれていない。その理由をどう見るか、引用構文の観点からなお考察する必要がある。

発話を取り込む引用構文だけを見ても、日本語の場合、文のスタイル、述語などに広がりがあり、引用構文の観点から単純ではない。作品ごとの特徴もある。更に江戸時代になると、吹き出しや庵点など視覚的な補助記号を使うによって表す方法も見られる。

まず、実際はどのように引用構文が使われているかをなお広く観察してみることが必要であろう。発話主の問題でも明瞭にする場合と曖昧にする場合があることがわかったが、どのように分れるのか、なお、他の作品も併せての観察が必要である。

注

（1）三上章『日本語の構文』（p一三四）

（2）寺村秀夫『日本語の文法』（下）（p一四六）

（3）引用には直接引用と間接引用がある。直接引用は誰かの発言（またはそれに準じるもの）をそのまま引用する、言葉の引用である。引用の形式としては「～と」が用いられる。（『基礎日本語文法』p一八五）

（4）柴谷（一九七八）は、ある文が他の文に埋め込まれていることが一番はっきりしている構文は人の言ったことを直接引用した直接話法であるとし、引用標識「と」によって「言う」とか「思う」を動詞とする文に埋め込まれていると述べた。そして、動詞は「言う」「伝える」「思う」「考える」といった「情報処理」を表す動詞であり、「入ってきた」「吹き出した」などは情

報処理ではないが、「と言って」の省略された形と考えたほうが良いとした（柴谷方良『日本語の分析』P八〇）

藤田（一九八八）は日本語の引用構文では「情報処理」を表す以外の動詞も現れることに注目し　動詞α類（Ⅱ類）と名付け、発話とそれと同一場面に共存する別の行為と並べて示す一種の並示的述語とした。そして、「言って」「思って」等の述語句省略説は不当であると述べている。（藤田保幸『国語引用構文の研究』和泉書院）

（5）鶴田洋子　学位申請論文『表現としての引用』p二四三

（6）『更級日記』本文の引用は新編日本古典文学大系『和泉式部日記紫式部日記更級日記讃岐典侍日記』から行う。また、『枕草子』本文の引用は萩谷朴校注『枕草子』新潮日本古典集成から行う。Pは上記による。以下同じ。

（7）発話思考の主である人物を、記されているかいないかにかかわらず、発話主とする。

（8）鶴田洋子（二〇〇三）「引用形式としての『吹き出し』」『新潟産業大学人文学部紀要』第一五号

参考文献

三上章（一九六三）『日本語の構文』くろしお出版

萩谷朴校注（一九七七）『枕草子』新潮日本古典集成第一一　新潮社

柴谷方良（一九七八）『日本語の分析』大修館書店

寺村秀夫（一九八一）『日本語の文法』（下）国立国語研究所

益岡隆志・田窪行則（一九九二）『基礎日本語文法』くろしお出版

藤岡忠美中野幸一犬養廉石井文夫（一九九四）『和泉式部日記紫式部日記更級日記讃岐典侍日記』新編日本古典文学全集二六　小学館

松尾聰永井和子（一九九七）『枕草子』新編日本古典文学大系一八　小学館

藤田保幸（二〇〇〇）『国語引用構文の研究』和泉書院

原岡文子訳注（二〇〇三）『更級日記』角川ソフィア文庫角川書店

池田利夫訳注（二〇〇六）『更科日記』笠間書院

川村裕子編（二〇〇七）『更級日記』角川ビギナーズ・クラシック日本の古典　角川書店

秋山虔校注（二〇一七）『更級日記』新潮日本古典集成三九　新潮社

現代日本語書き言葉均衡コーパス「少納言」
www.kotonoha.gr.jp/shonagon/

原文『枕草子』全巻
www.geocities.jp/rikwhi/nyumon/az/makuranosousi_zen.html

更級日記（全文）
www.asahi-net.or.jp/~KC2H-MSM/pbsb/sarasina.htm

（つるた　ひろこ　東京国際知識学院校長）

（表１）「と」に後置される述語

	引用構文の機能	内容	述語
①	発話	発話の内容	言ふ　語る　問ふ　呼ぶ　答ふ　伝ふ あり　聞こゆ　うたふ　詠む　のたまふ 嘆く　たづぬ　召す　おほす　申す
②	心内発話	心内発話の内容	思ふ　祈る　念ず　おぼゆ　ながむ ひとりごつ
③	音声映像の受信	受信した内容	聞く　見る　見ゆ
④	文字による受発信	文の内容	書く　あり
⑤	動作中の心内発話	動作中心内発話	待つ　隠す
⑥	感情を伴う発話	発話の内容	責む　むつかる
⑦	動作に伴う発話	発話の内容	泣く　笑ふ
⑧	心情に伴う発話	感情の内容	あはれがる　わずらはしがる　心苦しがる をかしがる　あはれ　うしろめたし

（表２）　文中に「発話主」が書かれているかどうか
　　Ａ発話主がある
　　Ｂ発話主がないが作者以外
　　Ｃ発話主がないが作者

	①発話																
小計	言ふ	のたまふ	おほす	きこゆ	申す	問ふ	語る	たづぬ	詠む	うたふ	呼ぶ	召す	嘆く	あり	答ふ	伝ふ	
43	25	2				3	4		1				1	6		1	A
17	10		1			3	1			1		1					B
21	12			2	2	1		1			2				1		C
81	47	2	1	2	2	7	5	1	1	1	2	1	1	6	1	1	計

		②心内発話						③受信			④		⑤		⑥		⑦		⑧心情			⑨	⑩	
合計	小計	思ふ	祈る	ひとりごつ	念ず	ながむ	おぼゆ	見る	見ゆ	聞く	書く	あり	かくす	待つ	むつかる	責む	泣く	笑ふ	○○がる	うしろめたし	あはれ	「。」	とてv	
61	18	1									2				1		1	1	5				7	A
28	11		1								1	1					1		2			1	4	B
94	73	37	1	2	1	1	4	10	1	7	3		1	1		1				1	1		1	C
183	102	38	2	2	1	1	4	10	1	7	6	1	1	1	1	1	2	1	7	1	1	1	12	計